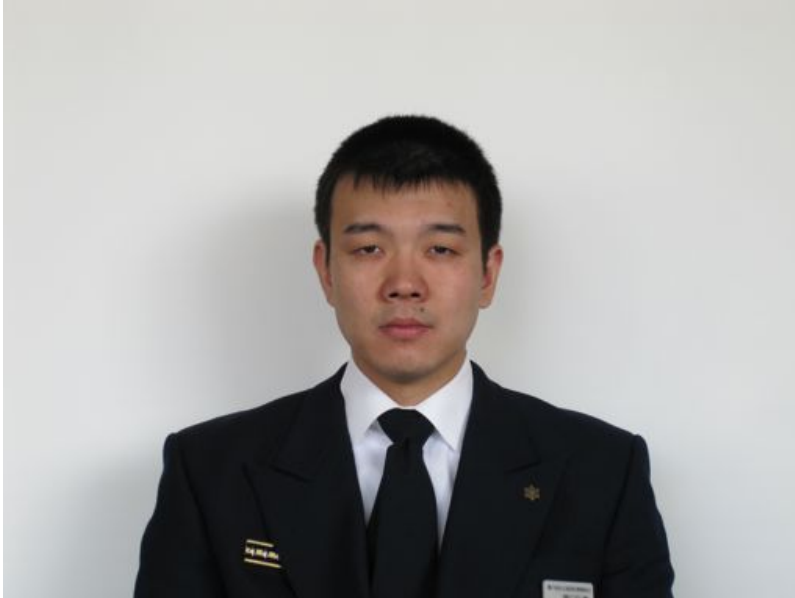


タイトル「卒業生たちの10年」
サブタイトル「経験が支えてくれた私」

1.自己紹介



名前:関口弘憲(せきぐちひろのり)
sekiguchi.jpg
出身:北海道札幌市
学歴:北海高等学校→北海道ハイテクノロジー専門学校(救急救命士学科)
略歴:滝川地区広域消防事務組合
消防本部総務課
滝川地区広域消防事務組合滝川
消防署救急救助課救急係
滝川地区広域消防事務組合江竜
支署庶務係
滝川地区広域消防事務組合新十
津川支署庶務係
滝川地区広域消防事務組合滝川
消防署消防課管理係(現在)

趣味:ドライブ、釣り、映画鑑賞,登山



まずは滝川地区広域消防事務組合について簡単に説明したいと思います。滝川地区広域消防事務組合は滝川市・新十津川町・雨竜町の1市2町で構成され、札幌市と旭川市のほぼ中間に位置する地域です。来年には赤平(あかびら)市消防本部と芦別(あしべつ)市消防本部との広域化が予定され準備が進んでいます。構成市町の人口は約53,700人、約25,000世帯が住んでいます。平成24年統計で火災は21件、救急出動件数は1,802件でした。札幌市から旭川市までつ

ながる国道12号線、日本海側へとつながる国道451号線、釧路市までつながる国道38号線、高速道路は道央自動車道、JRは函館本線と根室本線が走る交通事情の良い地域とも言えるでしょう。滝川市の名産物としては松尾ジンギスカン(写真1:北海道で知らぬ人はいない松尾ジンギスカン)や日本一の作付面積を誇る菜の花畑(写真2:菜の花畑)、病気の子供を支援するそらぶちキッズキャンプが開催される街であります。



私は当務隊として消防隊や救急隊、救助隊を兼任しいろいろな現場に出動しております。また、管理係としてその名のとおり消防庁舎や消防車両の維持管理（写真3：メンテナンスのようす）を担当し、メンテナンスや修繕業務（写真4:消火栓のメンテナンス)等の事務を担当しております。

2.なぜ救命士を目指し民間の養成学校を選んだのか？

救急救命士というよりまず消防士という職業に憧れたことが救急救命士を目指したきっかけです。それは私の伯父が消防士で小さな頃からその伯父の姿に憧れを持っていたからです。伯父の消防は小さな町の消防であるため、町外に出るにも届出を出さなくてはならず、常に町民のために非常事態に備える姿に子供ながら尊敬を抱いておりました。

私が小学校5、6年生頃の大晦日のことでした。毎年恒例である祖父の家に身内が集まり年越しをしていたときのことでした。祖父の家と伯父の家は同じ町内で伯父は「いやな予感がある」とのことです。消防無線を受信する受令機を祖父の家に持ち込んでの年越しでした。そこに火災を告げる無線が入り伯父はすぐに消防署へ向かったのです。ただ単純にたまたま偶然だったのかもしれませんが。ただ伯父の第6感に驚き、さらに尊敬の念が深まったのでありました。そこから私の将来の夢は消防士という職業に固まりました。中学生の頃から消防士になるための進路を調べ、まずは普通科の高校を卒業することを目指しました。そして高校3年生で地元消防である札幌



市消防局の採用試験を受験しましたが、落ちてしまいました。しかし、消防士になる夢は諦めきれず、公務員予備校に行く道も検討しましたが、消防に就職してから救急車に乗るための資格である救急救命士の資格取得を選び民間養成学校を受験、無事入学することができました。入学してからは厳しくも楽しい学校生活でした。学校のカリキュラムは救急救命士になるための勉強や救急隊の活動のシミュレーション実習、公務員試験対策の勉強でした。講師の先生方は当直明けの医師や大学病院の先生など道内はもとより道外からも教えに来てくださいました。

学科も実習も科目が終われば必ず効果測定の試験があり赤点を取れば留年が確定でした。赤点を取らないよう、留年しないよう、みんなで一緒に救急救命士の資格を取得し卒業するという同じ目標を持つ仲間として、助け合い協力し合う良い関係があったのではないかと思います。在学中の外部への実習では救急車同乗実習は東京都稲城市消防本部にお世話になり、病院実習は杏林大学医学部付属高度救命センターにて実習させていただき、東京の救急を少しの間ではありますが経験できました。道内では札幌手稲済仁会病院の救命救急センターで実習させていただき、運がよければドクターヘリに乗れるとのことでしたが、残念ながら乗ることはできませんでした。しかし、札幌の救命救急センターの実習も経験することができました。この経験は学生であった私にとって初めての救命現場の経験でした。この東京や札幌の経験は今の私にとって昔を思い出しては良い刺激となり、支えにもなっております。

3、特殊な経験及び特殊事例

私が救急救助課救急係2年目の年明け最初の救急事例です。「旦那がストーブの前で口から泡を吹いて意識が無い」との妻からの通報でした。隊長・機関員・隊員の3名で出動し私は隊員でした。現場到着時、意識レベル300で呼吸・脈拍も弱く搬送を急ぎました。車内収容後、容態観察すると心肺停止となったのです。すぐにAEDを装着し波形を確認すると心室細動でした。すぐに電気ショックを1回実施し、特定行為を実施しながら搬送を急ぎ、病院到着時に心室細動が継続していたため再度電気ショックを実施し病院に収容しました。すると意識は戻りませんでした。呼吸・脈拍が再開し医師に引継ぎ病院を引き揚げてきました。以前にも呼吸・脈拍が再開する事例は何例か経験がありましたが、全ての事例において予後は蘇生後脳症による死亡でした。しかし、後日、私の当務日にその男性がお礼を言いに消防署まで自分の足で歩いて来てくれたのです。話を聞くと胸骨圧迫の所が痛むのとAEDパッドを貼り付けた部分が少しやけどになっているとのことでした。「救ってもらった命を大切にしたいと思いま

す。」とお礼を述べられ帰られたのは言葉では言い表せない喜びがありました。これが私の初の社会復帰事例で10年間のうちこの1例だけです。

私が本署から異動になった江竜支署勤務1年目の事例です。登山者捜索（写真5：登山者捜索隊）の一報が入ったのは私が当務日の夕暮れ時のことでした。民宿の主人からの通報でした。本州からの登山者で宿泊の予約を受け、打ち合わせた時間に登山口まで迎えに行ったが降りてこないとのことでした。夕暮れ及び二次災害防止のためその日の捜索は中止となり、



翌日の早朝から第1陣を捜索に出動させるとのことでした。私はその第1陣として出動し初めての捜索事例でした。警察・雨竜（うりゅう）町役場職員・雨竜町山岳会と合同による雨が降る悪天候の中での捜



索でした。登山道（写真6：登山道入口）を登っていくと小さな沢が雨の影響で水かさが増して川のようにになっている横に不自然に葉っぱが敷かれ休憩したような跡にリュックが置かれていたのを発見。その付近を捜索するも雨のせいで沢の奥への捜索は危険と判断、その日の捜索は打ち切りとなり下山することになりました。翌日は天候が回復し（写真7：晴れば雄大な景色が楽しめます）、自衛隊を含む第2陣が捜索に当たり第1陣が進めなかった沢の奥で登山者を発見しましたが、残念ながら亡くなられていました。雨の影響で行けなかった沢の奥に登山者はいて、もしかすると私たち第1陣が発見できれば生きていたかもしれないと思うととても残念でした。悪天候、二次災害防止等を考慮し捜索を中断し下山の命令を下さなくてはならない隊長の苦渋の決断を学ばされた事例でした。

同じく江竜支署勤務2年目の事例です。雨竜沼湿原登山口から約20分程度の場所の休憩所で60代の男性が具合が悪いとのことでした。携帯電話が繋がらない場所で他の登山者の又聞き情報で登山口の事務所からの通報でした。私は当務隊で出動し通信指令室よりドクターヘリの要請がなされ、登山口の駐車

場に着陸することでした。先着隊の第1の任務は傷病者に接触すること。登山口まで行く間、追加情報で呼吸、脈拍がなく、登山口の事務所に設置されているAEDを事務所職員が現場まで持って登り、心肺蘇生法を実施中とのことでした。必要な資機材を担いで駆け登り、傷病者へたどり着いたときには追加情報どおり心肺停止状態でした。携帯電話が繋がらず特定行為指示要請の電話もできず、処置という処置はほとんどできませんでした。隊長判断で途中途中で胸骨圧迫を実施しながらの担架での搬送でした。登山口にはドクターヘリが着陸し車が入れるギリギリの地点までドクターを乗せた救急車が待機し車内に収容しました。そこでドクターにより死亡判定が下り、一緒に登っていた奥さんが泣きくずれた姿を見て、できることの限界を思い知らされました。

まだまだ困難な事例を経験している同期もたくさんいることと思います。良い結果の事例や残念な結果の事例、いろいろな事例があると思います。良い結果となれば励みになりやる気に繋がる経験となると思います。残念な結果の事例は気持ちが落ち込みます。しかし、私はどれだけ頑張れたか?全力で自分の力を出しきったか?を問いかけるようにしています。

4、全国の消防職員に伝えたいこと

少しずつ景気は上向き傾向にあるかもしれませんが、地方財政は冷え切っており給料削減や職員が減少していく中、地域住民の消防への要望は多種多様化しつつあり、さらには住民目線も厳しくなっていると思います。時には一生懸命の気持ちが伝わらず公務員バッシングに変わり気持ちが折れてしまうことも多かれ少なかれあるかもしれません。しかし、これからの公務員は厳しい事にもかかわらず、民間救命士養成学校卒業生を含む若者が消防士を目指し就職してくることと思います。消防の世界は何事も経験だと思っています。私も学校での知識ばかりで現場のことは何も知らずシミュレーションと現場の違いのギャップに困惑した時期もありました。しかし、この年になり経験を積み重ねることによりシミュレーション通りには行かない現場があることが少しずつわかってきました。私がこのようなことを言うのも諸先輩方を含む全国の消防職員に対しては大変恐縮なことと思いますが、消防に就職してくる若者にとって現場経験は先輩しか教えることができません。この厳しい時代に新たに消防士を目指し就職してくる若者にどうか温かいご指導をお願いしたいと思います。そして、この厳しい時代を新たな仲間と一緒に乗り越えられるよう育てていただきたいと思っています。

5、結び

この「卒業生たちの10年」を執筆させていただくに当たり、私の消防人生である10年間を改めて振り返らせていただきました。民間養成学校時代、ともに学んだ仲間たちも小さな消防から大きな消防、医療機関など日本全国いろいろなところで働いている事と思います。私にいろいろな経験があったように仲間たちにもいろいろな経験があったことと思います。これからもいろいろな現場があるかと思いますが、体を大切に活躍を願いたいと思います。